



主宰者



日本参津地まん

テーマ本型讀書会の最大手と言われる「アウトプット勉強会サロン」。その支部「東京文学サロン月曜会」をのぞいた。会場は東京・代官山のカフェ。アットホームな靴を脱いで座るという変わった造りで、夜達の自宅に集まっているような感覚。思わずまったりしてしまう。この日のテーマ本は「イン・ストリーズ」。繊細で純粋な米国の若者たちを描く著者サリンジヤーはカリスマ的人気を誇る作家。だが、そのストリー展開はトリッキーで読み手を困惑させる。参加者たちの探究心を刺激したのは、ある登場人物の唐突な自殺の理由「もともと神経衰弱だったのでは」「麻薬中毒だった気もす

「職場の人とも家族ともない濃い話を揃える。この讀書会で出会い、わずか4カ月で結婚したカップルがいるというのも納得だ。

この日の参加者は約100人。20〜30代が中心で、中には大学生も。6〜7人のグループに分かれて議論する。テーマ本の「イン・ストリーズ」は短編集、翻訳者による表現の違いも話題になり、英語の原書と読み比べる場面も。会場は「Chano-ma DAIKANYAWA」(会費2000円)



紹介本型

朝活で人脈を広げる

読書朝食会 Reading-Lab

URL = http://ritxi.jp/view_community.php?id=3412667
 会員数=2106人(4月11日現在)



加藤たけしさん

紹介本型で最大級の規模を誇る「読書朝食会yogin-lab」。休日、東京・新橋のカフェを借り切って開かれた空に参加した。約50人の参加者が5〜6人のグループに分かれ、それぞれが持参した本を1〜2分でプレゼンした後、5分ほど議論する。

ビジネスインポの高い人が多く、名刺交換が活発。マーカーや付箋の使い方など讀書ノウハウの話題でも盛り上がる。20代の参加者がハゲタカファンズと言われても、昔話でイメージがわからない...と漏らし、30代が驚く一書も。

この日は、ビジネス書の著者の講演もついた特別版。普段は特に店を予約しないことが多い。



休日に開かれたこの会は朝9時30分からスタート。会場は「アーキテクトカフェ」で、留守し、貸し切りで、会費2000円、約45分の讀書会の後、テーマ本の著者と講演があった。平日は朝7時に始まることが多い。主宰者以外にも会を仕切れる人が多くいるので、今では都内のどこかでほぼ毎朝開催されている。

この日、紹介された本

- 【「生き残るSEI」(篠田庸介著/日本実業出版社)】
勉強会を主宰していた時に、著者にお世話になった。最近出た本を読み、おられない主張を感じた(IT企業勤務の男性)
- 【「ハゲタカ」(眞山 仁著/講談社文庫)】
自分の周囲で企業買収があった時期に読み、勉強になった小説としての面白さも最高(起業支援を手がける女性)
- 【「11歳のバリエットが教えてくれる「経済」の授業」(田口智隆著/フオレスト出版)】
参考文庫のバリエットの伝記【スノーボール】が読みたくなった(外資系企業勤務の女性)
- 【人と違うことをやれ!】(堀 敏一著/PHP文庫)】
社会人1年目に読み、自分の弱みに気づいた。行動力に頼るあまり、深く考えできていなかった人村サービス企業勤務の女性)
- 【「ソウルサントの習慣」(野口吉昭著/朝日新書)】
準備の重要性を痛感。「ウイスキーもチーズもポートも一定の熟成が重要」という言葉が印象深い(IT企業勤務の男性)